

今月は先月の残りの分をお送り致します！お題は「ノイズ」前回は『1) 発達障がいのある子どもの場合は』の前編で終わっていたと思いますので、今月は残りの後編部分から最後までです。最近「訪問授業」で地域の小学校のクラスメートに向けて発達障がいの理解の話をしに行っていますが先日坂井先生に質問したんです。「訪問授業において、ここだけは抑えておけっつのはありますか？ヒントを下さい」と。返ってきたメールにはこう書かれていました。「排除しないという事です」・・・み、短い！！そして、ふ、深い！！しっかり伝えていきますっ！！ 久田

第37回 『わかるように伝えていきますか』

香川大学 坂井 聡

☆ノイズ (Vol.2)

1) 発達障がいのある子どもの場合は (後編)

また、心理的ノイズについても注意しておく必要があります。発達障がいのある子どもの中には、日常生活において注意や指導を受けることが多くあるために、自尊心が低くなっている子どもがいます。注意や指導されることが多くあるために、「ぼくはダメな人間だ」と自信をなくしているような子どもが該当します。このような場合、こちらが何かを伝えようとしても最初から「また、叱られる」と思ってしまうたり、「また何か注意されるに違いない」と思ってしまうたりするために、送り手側のメッセージを理解しようとしないうようなことも起こると考えられます。子ども側の先入観がノイズになっているのです。

その逆で、送り手側の先入観がノイズになることもあります。それは、発達障がいのあるということで、「あの子はあるから」と思ってしまう、話をしてしまう場合です。これもノイズとなってしまう場合があることを送り手側は理解しておかなければなりません。

また、騒音や環境がノイズになることも多くあります。特に、発達障がいのある子どもの場合、感覚が過敏であることがあり、その結果、光がまぶしすぎたり、周囲の音が気になったりしてしまい、相手からの話に集中することができない場合等がそれに当たります。

2) どのようにすればいいのか

送り手として意味的ノイズを発してしまうような場合は、その言葉がどのように相手に伝わっているのかを、丁寧に教える必要があります。絵や文字等にして視覚的にわかるように伝えなければなりません。また、相手の感情にも気がつくようにするために、感情表現用のシートなども用いる工夫なども考えられます。感情は見えないので、わかりにくいので、視覚的にわかりやすくして伝えるようにするのです。

社交辞令などについては、よく使われる言葉については、言われたときの対応の仕方も含めて練習しておくことが大切です。「いつでもどうぞ」と言われたときには、訪ねる前には相手の予定を聞く必要があることも合わせて教えるということです。

正直に言いなさいという場合も同様です。人の容姿等、個人情報に関することには触れないようにするなど指導することも重要です。

自尊心が低くなってしまうことが原因で、何でもネガティブに受け取ってしまうような場合には、自尊心を高く保つことができるように声かけし、評価する必要があります。セルフエスティームといって、自分の価値を評価して、自分は自分で大丈夫というように思うことができるようにしていくのです。その子が自信を取り戻すことができるように当たり前のことでも褒めるというようなことから始める必要があります。行動を注意するのではなく、適切な行動を提案し、その行動ができたときにはしっかり誉めるようにするのです。

騒音などの環境がノイズになる場合には、その子にとって不快と考えられる感覚刺激を遮断するような工夫も必要です。

ヘッドホンや、耳栓、サングラスなどで感覚を遮断することで、ノイズを取り除くことができる場合もあります。

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞 (著書)

暮らしの中のコミュニケーション (やまびこの里) クラスルームコミュニケーション (こころリース出版会) 自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア (エンバフメント研究所) など